



2006年

SORA 15号

晴夜 (15) | 2

柴田 佐知子

蟾蜍いつも初老の貌をして

石仏に苔の迫りてきたりけり

ほととぎす金剛杖は縮むばかり

千手仏千の螢を放ちたる

—「俳句」八月号より—

ゆすらうめ母を語れば訛るなり

退屈な午後の風鈴ときどき鳴る

どの橋も夜涼の水に架かりけり

—「俳句研究」十月号より—

汗の顔見られて少したぢろげり

闘ひて色の濃くなる熱帯魚

殘響

荒井千佐代

国東の全山後光のごと青葉

「俳句王国」収録のため国東へ 六句

山路みな仏へ向かふやまぼふし

師の碑据ゑ六郷満山したたれり

えごの花まじりし安岐の溪の音

青田風師の碑に力賜はりて

梅雨空に拝す一仏一仏を

緑蔭にゐて波音を聞く日なり
白南風や日の届かざる懺悔台
聖玻璃を抜け来し西日首筋に
パイプオルガンの残響や早星
浮雲に触れたくて伸ぶ泰山木
遠巻きに海緑蔭にベビーカー
保育室に散らばる玩具雲の峰
ほうたるが繙帯の指離れざる
眠るとき根の国想ふ螢籠



二の糸

服部 早苗

捨てておかれて菜の花となりにつけり
春の夜の絹の組糸右手左手
抱き寄する犬の体温花ぐもり
夕桜ポケットにある陀羅尼助
袋角おたべの餡のすけてみゆ
師なきあと何のさみしさ夕薄暑

麦の秋論されてゐる犬のゐて

門燈のきれてをりけり栗の花

海ほほづき少女にもどる母のこゑ

夏の風邪ボタンダウンの衿もとに

藍浴衣二の糸めきし次の姉

磯蟹にとほき礁の見えかくれ

みづいろの声出できたるかき氷

住所氏名書き込んでゆく登山口

蛇を追ひ蛇に追はれてゐたりけり



ももいろ

小林 朱 夏

氷屋の肩手拭のいつも揺れ

安息の刻は短かし蝉時雨

ももいろの頬を潰して昼寝の子

新涼の川ふたつ越え母に会ふ

白桃の掌に納まらぬ丸さかな

物欲も若さと思ふ葉鶏頭

秋の蚊の囁くやうに寄り来たる

稲雀泣く子笑ふ子元気な子

気負ひなく老いに向ひて秋扇

秋高し疲れを知らぬ三輪車

椋鳥を集め一樹が森となる

群れゐてもなびくを嫌ふ曼珠沙華

秋彼岸供へて不味き物はなし

峰々の裾野はひとつ秋夕べ

黒髪の残る洗骨鳥渡る



神無月

苑
実
耶

蝉時雨世の音全て打ち消せり

夕映えの水のしたたる釣忍

空蝉の折り重なりし一樹かな

蝉時雨の真中どこに居ようとも

秋風や白をひろぐる鷺の舞

西瓜半分貰ふに実家訪へり

人波を外れし二人放生会

彼岸花棚田は四角三角に

大層な病名貰ひ神無月

秋澄むや代はりて選りし子安石

もみぢ狩ほどよく人の居てたのし

溝蕎麦や地震の疵ある登り窯

秋うららぼどよく離れ夫婦岩

秋の陽に押されてをりし家路かな

